

## 【資料】

## 第7回スリランカ・日本連携研究国際学会 (August 24, 2019, Kandy, Sri Lanka)に出席して

中尾敏彦  
元山口大学

### はじめに

インド洋に浮かぶ真珠と呼ばれ、セイロン紅茶の産地として古くから知られるスリランカは、北海道のおおよそ8割の国土に約2千万の人口を擁し、農業を主要産業としている。主な農産物は、米、ココナツ、紅茶、天然ゴムなどである。牛の飼養頭数は114万頭で、その内82万頭が乳牛である。

このセイロン島の中央に位置する、シンハラ人最後の王朝の都で、スリランカ仏教の聖地でもあるキャンデイにあるペラデニヤ大学で、8月24日に、第7回スリランカ・日本連携研究国際学会 (7<sup>th</sup> International Conference on Sri Lanka-Japan Collaborative Research; SLJCR 2019) が開催された。この学会では、スリランカと日本の両国から、それぞれ、共同学会長が任命され、2名の共同学会長によって運営が行われる。今回、日本側の共同学会長として、この国際学会に出席の機会を得たので、学会の概要を報告する。また、学会前日に獣医学部の視察を行ったので合わせて紹介したい。

### 1. 国際学会 (SLJCR 2019)

この学会を主催したペラデニヤ大学は、スリランカを代表する高等教育研究機関であるコロombo大学に次ぐ歴史と実績を有する総合大学で、伝統的に日本との結びつきが強く、特に、1996～2003年までの間、日本の政府開発援助によって、歯学部の整備と教育プログラムの充実がなされたことがよく知られている。2012年には、日本政府の援助により、スリランカ・日本教育研究センターが開設され、それ以来、毎年、SLJCR国際学会が開催されている。この学会の特徴は、医学、工学、経済学、社会学、教育学などから、農学、獣医学、林学などにいたるまで、あらゆる学問分野を網羅していることと、研究発表は、スリランカと日本の研究者の共同研究に基づいたものとされている点である。要は、両国の研究者の共同研究の成果を共有し、将来の様々な分野における共



写真1. 第7回スリランカ・日本連携研究国際学会の  
開会式  
壇上、右から、共同学会長 (スリランカ)、  
共同学会長 (日本)、副学長、日本大使、スリ  
ランカ・日本教育研究センター長

同研究の拡大・発展につなげて行こうというのが、主な目的と言える。学会では、両国の著名な研究者による招待講演も行われている。

今回の学会当日は、主賓の杉山日本大使、ペラデニヤ大学副学長(学長はこの国の首相なので、実質的な学長)、スリランカ・日本教育研究センター長、共同学会長を始め、各学部の学部長などの役職者などの臨席の下で、開会セレモニーが行われた(写真1)。次いで、筑波大学村山名誉教授の招待講演「地理空間情報技術によるアジアの都市化現象の研究」と、コロombo大学Melengoda教授による基調講演「インド洋から外の地政学：海洋政策第3次計画と自由で開放されたインド太平洋戦略」が行われた。

その後、3会場に分かれて、分科会ごとに、両国の共同研究の成果が発表された。午前中、第1会場では、「農学、畜産学、林学」、第2会場では、「健康と公衆衛生」、第3会場では、「気候と環境」の分科会が行われた。筆者は、農・畜・林学分科会で、「牛の繁殖管理」のテーマで招待講演を行った。畜産学・獣医学関係の発表は、スリランカのクルネガラ地区で飼育される交雑種乳牛の

分娩後における卵巣機能回復（ワイアンバ大学、新潟大学、広島大学）、スリランカの原因不明のヒト慢性腎臓病発生地域における牛の血液および乳中の重金属蓄積状況（ペラデニヤ大学、広島大学）、スリランカの交雑種乳牛における潜在性乳房炎の指標としてのNAGase活性（ペラデニヤ大学、広島大学）の3題であった。この分科会の座長を務めたのは、獣医畜産学部のProf. Jayawardenaで、帯広畜産大学に留学して、学位を取得した方であった。

公衆衛生関連では、狂犬病診断ユニットにおける狂犬病検査材料の検査結果（ペラデニヤ大学、北海道大学）、スリランカ北西部の小売店やスーパーマーケットチェーンで販売される鶏肉と食用臓器における*E. coli*検出率（ワイアンバ大学、京都大学、他）、1型糖尿病に罹患したスリランカの青年期若者の自己ケア行動に関する民族誌学的研究（ペラデニヤ大学、群馬大学、コロombo大学）、改変インハウスダブル遠心法による犬の相同多血小板血漿の作成法（ペラデニヤ大学、北海道大学）、新潟県における学童の精神のおよび肉体的健康状態—予報（ペラデニヤ大学、新潟大学）などが発表された。

午後は、3会場とも、「社会人文科学」で、スリランカの大学と筑波大学、佐賀大学、早稲田大学、専修大学、京都大学、名古屋大学、島根大学などとの共同研究の成果が発表された。

学会終了後、午後7時頃から、キャンパス内の副学長公邸の広大な庭園で、夕食会が催された。ここでは、かつて、帯広畜産大学の宮本教授のもとで、牛の繁殖生理学の研究を精力的に行い、学位を取得した、獣医畜産学部のミサカ教授とも旧交を温めた。

今年は、4月にコロomboで起きた凄惨なテロ事件の後、一時、日本からの渡航が制限されたことも影響して、いつもの年よりも、日本からの参加者が少なかったようであった。スリランカと日本の共同研究と言う大きなしぼりの中で、すべての学問分野を網羅して学術交流を行う、ユニークな学会として、今後さらに回を重ねて、充実発展することを期待したい。

## 2. ペラデニヤ大学獣医畜産学部でのセミナーと動物病院視察

ペラデニヤ大学獣医畜産学部は、スリランカ唯一の獣医学教育機関であり、1947年にコロomboのスリランカ大学（当時）の獣医学科として創設され、1954年にペラデニヤ大学に移転している。獣医学教育は4年制で、1～4年目までの学生総数は現在約380名。修士課程と博士

課程を有する大学院には約30名が在籍している。目下、獣医学教育の国際標準化を目指して、OIEの支援を受け、マッセイ大学（ニュージーランド）の協力により、獣医学教育カリキュラムのアップグレードに取り組んでおり、教育年限を5年制に延長する計画とのことであった。

8月24日の国際学会の前日に、高学年学部生と大学院生、それに関連分野の教員を対象に、牛の繁殖管理に関するセミナーを行った。そして、そのセミナー後に、学部内の視察を行った。

学部到着後、先ず、学部長を表敬した。学部長は、山口大学連合大学院（所属は宮崎大学）に留学して、学位を取得した方で、専門は獣医生化学。温厚な紳士で、翌日の国際学会の開会セレモニー等でも、場慣れしていない筆者に何かと適切な指示を与えてくれた。その後、セミナーに出席する教授達や政府機関の専門家の挨拶を受けてから、会場の講堂に入った。殆どが高学年学部生と大学院生で、百数十名といったところ。

講演のタイトルは「乳牛の繁殖管理における外因性および内因性プロゲステロンの応用」で、分娩後の発情発見率向上と、授精後の受胎率向上への応用について、理論と実際を解説した。講演後、主に教授連中から質問があり、講演内容の理解が深まったものと思われる。現在世界中で広く使われているCIDRは、スリランカでは、まだあまり普及していない様子で、代わりに、プロゲステロンの注射剤や皮下インプラント剤を使えないかと言う質問もあった。昨年秋にベトナムで開催されたワークショップでも、指導的な臨床獣医師から、同じような質問があったことが思い出される。

セミナーの終りに産業動物生産衛生学講座主任のPushpakumara教授が閉会のあいさつに立った。ここで驚かされたのは、教授が、30年以上も前の筆者とのあるできごとを紹介したことであった。彼は当時、大学院への留学先として、英国と日本を希望しており、英国政府と日本政府の両方の国費留学生に応募した。その際、酪農学園大学在職中の筆者に、指導教員をお願いしたいので、受け入れ承諾書を送ってほしいとの連絡があった。もちろん、承諾書は送ってあげた。その後、幸いにも、日本の国費留学生として採用されることになり、筆者も受け入れの心づもりをしていた。ところが、その直後に、本人から、実は併せて応募していた英国の国費留学生にも採用され、Royal Veterinary Collegeに留学できることになったので、申し訳ないが、日本の国費留学生の方は辞退したいとの連絡が入った。よくある話ではあったが、残念な思いをしたのも事実だった。今回、ペラデニ



写真2. 元ペラデニヤ大学教授Dr. Nevil de Silvaと（ペラデニヤ大学獣医畜産学部にて）

ヤ大学訪問に当たって、筆者も、その時のことを思い出してはいた。彼は、英国の著名な獣医繁殖学の教授の下で学位を取得しているはずなので、その後もしかすると、スリランカの大学あたりで活躍しているかもしれないと考えてもいた。その本人が何と、ペラデニヤ大学の産業動物臨床講座の主任教授として、目の前に現れた訳で、驚きと喜びが交錯する思いであった。

セミナーには、1994年4月から1年間、日本獣医師会のアジア獣医師研修事業の研修生として、北海道大学に籍を置きながら、北海道農業共済組合連合会家畜臨床講習所（当時）で研修を積んだDr. Nevil de Silvaも参加してくれ、澤向先生、安里先生、木田先生から指導を受けたことを懐かしく語ってくれた。彼は帰国後、ペラデニヤ大学の産業動物臨床の教授を務め、すでに退職している（写真2）。

セミナーの後、山口大学時代の教え子で、ペラデニヤ大学の獣医生理学准教授のDr. Bimalkaの案内で、学部内を駆け足で見学した。印象に残ったのは、小動物病院であった。小動物臨床講座主任の女性教授から話を聞くことができた。元々、学部事務室の隣の小さな部屋で細々と診療していたが、設備の整った大きな附属病院を新設してから診療頭数が増加し、今日では1日平均診療件数は30～40件に達している。病院は、学生の臨床実習の場ともなっているが、目下の悩みのタネは人手が足りないこと。小動物臨床講座には、10人の教員が配置されているが、うち4人は留学などのために休職中でお手上げの



写真3. ペラデニヤ大学附属動物病院の手術室と診察室（大学HPより）

状態とのことであった。

病院では、学生たちが症例を囲んで、熱心に実習しており、活気にあふれていた（写真3）。スリランカにおける小動物獣医療の拠点として、今後、ますます発展しそうな可能性が感じられた。

### おわりに

スリランカは、今回が2回目の訪問であったが、一番の印象は、人々が、心にゆとりがあり、温厚で、親切で、正直であり、とても居心地のよいところということであった。この点は、片時も気を緩めることができない隣国インドの人々とは大きく異なると思われる。その背景にあるのは、国全体が美しい自然と穏やかな気候に恵まれていることと、人口の70%が仏教徒だということではないかと思う。国のいたるところに大きく美しい仏陀の像が見られ、人々にいつでも救いの手が差し伸べられるような雰囲気醸し出している。仏教徒とヒンズー教徒（13%）やイスラム教徒（10%）との関係も良好で、宗教間の衝突も、日常的には殆どないと聞かされた。

牛乳・乳製品自給率の向上のために熱心に取り組んでいる多くの獣医師や農家の人々との交流を通じて、この「インド洋の真珠」の発展に貢献できればと思う。

なお、今回の国際学会への出席に当たり、スリランカのAnalytical Instruments Private LimitedとPelwatte Dairy Industriesの両社から旅費の援助をいただいた。ここに記して、深く感謝の意を表したい。